

---

# 人情の左手

takosashi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人情の左手

### 【Nコード】

N8999S

### 【作者名】

takosashi

### 【あらすじ】

ある小さなプレス工場で起こった悲劇的な事故。そして姿を消した若者。

2人の間に何があったのか？ 鍵を握るのは唯一の女性社員、通称マルか？ それとも…社長の困惑をよそに、意外な真実が明らかになる。

( 1 )

その朝：

大谷プレス有限会社の常勤の工員たちの車が、駐車場に乗り入れ始めていた。

駐車場は工場から100メートルほど離れており、そこからは歩いていく。

常務の高取修は、車から降りると、なにか違和感を覚えた。

社員30名ほどの、小さなプレス工場だ、誰がどの車に乗っているかは、完全に把握している。

( 確か昨日の夜勤は… )

ベテランの重森善三と、入社してまだ1年にも満たない有沢健一の、2人だったはずだ。

( 有沢はもう帰ったのかな？ )

重森のうす汚れた軽トラックはあったが、いつもピカピカに磨いてある有沢のミニが無かった。

最近の若者は先輩を残して自分だけ退社することに、特に抵抗を感じない者が多いが、有沢はある意味で古風な新人だった。

「デートなので帰ります」といったようなセリフを、簡単に吐けるような若者とは違う、と高取は有沢を評価していた。

( 変だな )

工場へ向かおうとして、高取はぎくりとして足を止めた。

あれはパトカーではないか。

何人かの工員が、赤いランプを指差してがやがやと話している。いやな予感がした。

(労災か?)

いや、警察が来ているということは、事態はもつと悪いだろう。とにかく工場へ行こう。

高取は走り出した。

パトカーの傍で、社長の大谷辰義が待っていた。

工場と隣接している自宅で寝ていたところを、叩き起こされた、というあんばいだった。

「おーい、高取！」

大谷は小太りの体を揺すりながら駆け寄ってきた。

「どうしたんです、社長！ まさか……」

「おれも、いま聞いたばかりなんだ。シゲさんが大ケガをした」

「なんだって……それで、有沢は？」

「有沢？」

「いるんですか？」

大谷は、たった今気づいた、といった様子で、

「そういえば、いないな」

「警察を呼んだのは誰ですか」

「マルだ」

事務担当の「いかず後家」の、マルこと白石丸美。唯一の女性社員だ。いつも誰よりも早く出勤する。

「おれは今、頭が混乱していてダメだ。高取、お前とマルで、警察と話してくれ」

「シゲさんのケガは？ 容態はどうなんです」

「30分くらい前に救急車で運ばれていった。左手首を切断したんだ」

「ええっ……！」

(2)

「お仕事中恐れ入ります。しばしの間、ご協力願います！」

玉木と名乗った警官が、工員たちに大声で呼びかけた。

「私が話します」

高取が前へ出た。玉木は芝居がかったような口調で、

「救急車が到着したとき、重森さんは意識がなく、辺りは血の海でした」

「……」

「有沢さんが突然いなくなったことと、関係があるかどうか、確かめなければなりません」

「……どういうことですか？」

「有沢さんの勤務態度は、いかがでしたか？」

「真面目な青年です」

「重森さんと、何かトラブルのようなことは？」

「シゲさ……重森は昔気質のプレス職人で、気性が荒く、トラブルはしょっちゅうでした。だが根は人情に篤い男だ。まして有沢のことは、弟子のように可愛がっていたんです」

「有沢さんのほうでは、どう思っていたのでしょうか？」

「あんた何が言いたいんだ？ 有沢は、テレビゲームばかりやっている今時の若いやつとは違うんだ」

高取が怒りをあらわにし始めると、水を差すように、どこかで奇妙な音楽が鳴った。

「失礼」

玉木はケータイを取り出し、2、3言ぶつぶつと話した。

そして、また芝居がかった仕草でケータイを閉じると、

「残念です。重森さんは亡くなりました」

(3)

大谷が事務所に入ってくると、マルは露骨に顔をしかめた。

「社長、酒くさいよ」

「酒でも呑まなきゃ、やってられねえよ…」  
大谷はソファーに、どすん、ともたれかかった。  
マルはキーボードをタイプする手を止めると、  
「シゲさんが死ぬなんて、ねえ…」  
「おまけにあの若造までいなくなっちゃった。この道30年のベテランと、将来ある若手と、両方なくしちゃったわけだ」  
「あの坊や、まだ見つからないの？ まさか…」  
「通夜にも来なかつたし、アパートにもいない。いま警察が捜している。重要参考人だな」  
「…」  
「マル、お前、何か知らんか？」  
「ええ？ 何であたしが？」  
「たとえば、逃げるところを見たとか…」  
「見てないな。見ていてもおかしくない、とは思っけど」  
「シゲさんは血だまりの中に倒れていた。発見がもう少し早ければ助かる可能性はあったそうだ。と、な  
ると、有沢は明らかに何かまずいことがあったんだ」  
「あの子がシゲさんを殺したっていうの？」  
「まだ、そうとは限らん。しかしすぐに119番せずに、逃げたわけだからな」  
「パニックになっちゃったのかも」  
「2人きりの時に何があったのか、今となってはまるっきりわからん。確かなのは、シゲさんは何かのはずみでプレス機の中に手を突っ込んだ、ってことだ。有沢はそれを見るはずだ」  
「安全装置は働かなかつたの？」  
「いや…それがな」  
大谷は苦虫を噛み潰したように、  
「シゲさんの悪いクセでな。トシで眼が悪くなってきたもんだから、

顔を近づけて見ないと機械の調子が

わからん、と行って、安全装置をわざわざ切ってプレス機を動かすことがよくあった。たぶん今回もそうだったんだろう。おれが口を酸っぱくして、何回もやめると言っても、聞かなかつた。のぞき込んでると

ころを後ろから押されりゃ、ひとたまりもないだろうさ」

「…社長にも責任あるね」

「ああ、わかつてるさ！ 業務上過失致死だ。シゲさんの遺族からも、そのうち賠償とか、話を持ちかけてくるだろう。この工場も、もうこれまでかもしれん…」

「あきらめるには、まだ早いよ、社長」

「なんでだ…？」

「有沢くん…あの子の居所を、あたしはだいたい知ってるんだ」

(4)

有沢は実家にも帰っていなかった。

有沢の両親が呼ばれ、彼のアパートの部屋が調べられた。

取調室で、茫然自失の体の2人と、玉木は向かい合って座っていた。

「健一くんが行きそうなところに、心当たりはありますか」

「いえ…」

有沢の父が消え入りそうな声で答えた。母は下を向いておし黙っていた。

「交際している女性は？」

「さあ…」

「いいですか、お父さんお母さん」

玉木は急に声を荒げた。

「場合によつては健一くんは殺人犯になりかねない。それに多感な年頃だ、変な気を起こさないという保障はないんです」

「わかっています、刑事さん、どんなことでも、協力させていただきます」

い

「玉木は今度はやや柔らかく尋ねた。」

「彼はお金に関してはどうです？　しっかり者ですか」

「いえ…それが、あればあるだけ、遣ってしまつたちでして」

「そうですね。まあ、まだ若いですからね。どこかから借金していた、ということはありませんか？」

「私どもの知る限りでは、ありません」

「事件当日は、工場の給料日の3日前でした」

「はい…」

「そのとき、彼はかなりお金に困っていた可能性がある」

「…」

「これが彼の部屋から見つかりました」

玉木はデスクの上に、ビニールに包まれた、汚れた紙のようなものを置いた。

それは5000円札だった。

「よく見てください。シミだらけでしょう。鑑識に回したところ、

すべて重森さんの血液だとわかりました」

父は絶句し、母は嗚咽をもらし始めた。

(5)

車に乗り込んだ玉木は、ため息をもらした。

「やれやれ。憎まれ役はつらいもんだ」

運転席の井岡は苦笑しながら、

「ご苦労さまです」

「発見されたときの、ガイシャの所持品は？」

「えーと、ポケットに、タバコと、千円札、それと小銭。財布は持たない人だったようですね」

「例の五千円札だが…なぜあれだけ抜き取つたんだらう？」

「普通なら、あきらめるはずですね」



「そう、血まみれの五千円札なんて、取っても使いようがない。すぐに足がつかだろ。あんな目立つも

の、まさか銀行へ持っていくわけにもいかんだろ。」

「取ってから、始末に困って…?」

「まあ始末には困っただろうな。だが、あんなもの、焼き捨ててしまえばすむ。なぜ、見つけてください、と言わんばかりに、パソコンの脇なんか置いてあつたんだ?」

「玉木さん、そのパソコンなんですがね…」

「パソコンがどうした?」

「彼のブログを調べたんです」

「玉木はきよとんとして、

「なんだ? ブログってのは」

(6)

「その子、旦那さんを亡くしてから、ちょっと患ってしまって…」

「マルと大谷を乗せた車は、郊外のあるマンションに向かっていた。」

「家事はできるんだけど、外出はだめなのよ」

「うつ病か」

「着いたわ。そこよ」

「その女のところに、有沢がいるってのか?」

「2人は車から降りた。」

そして階段を上って、マルはその部屋の呼び鈴も鳴らさず、勝手に合鍵で開けた。

大谷は何がなんだかわからず、突っ立っている。

奥のほうから、泣き叫ぶような声が聞こえてきた。

(有沢…!)

「さあ、メソメソしてないで、一緒に来るんだよ。男なら、けじめをちゃんとつけるんだ」

「マルに半ば引きずられるように、有沢健一が出てきた。」

「有沢：お前…」

「す、すいません！　しゃ、社長！」

有沢は鼻水と涙をまきちらし、その場で土下座した。

「ほら、お迎えが来たようだよ」

パトカーのサイレンが聞こえ、やがて玉木と、井岡がやってきた。

「有沢健一、障害致死の容疑で、19時25分、緊急逮捕する。ワッパはめるぞ、いいな？」

有沢の手首に手錠がかけられた。

(7)

「マル、どうして奴をかくまった？」

「今回のことはね…憎み合いで起こったことじゃない、ってことをはつきりさせてから、あの子に罪を

償わせてやりたかったんだよ。でなきゃ、シゲさんも浮かばれないだろうからね」

「つまり、有沢はシゲさんに借金を申し込んだんだな？」

「そうだよ…でも、頑固で不器用なシゲさんのことだからね」

「バカ野郎、3日くらい食わなかったって死にやしねえ、そう言ったと…それである若造は、キレちまったのか？」

「まあ、そのへんはいまどきの子だね。甘ったれてんだよ」

「で…シゲさんの背中を突き飛ばした…」

「そう。まさか安全装置が無効になってるとは知らずにね」

「なんてこった…」

「肝心なのはそこからだよ」

「そして君の見てる前で、重森さんは意識を失った」

「はい…」

「そして問題の五千円札だ。どこにあった？」

「シゲさんの…その…」

「切断された手に握られていたんだな？ なぜ、取ったんだ？」

「シゲさんの気持ちを疑った自分が恥ずかしかった。いえ…人間として僕は…取り返しのつかないことをしてしまった、そう思ったんです。シゲさんは言葉は荒くても、ちゃんと僕のことを思ってくれていた…」

それで僕は…僕は…」

玉木は傍らの井岡に耳打ちした。

（だいぶ混乱してるな）

（ええ…）

「シゲさんは、僕にお金を貸してくれるつもりだったんですよ！」

「わかった。もういい」

玉木は有沢をなだめるように言った。

「君はまだ若い。罪を償ってから、大いに人生を楽しめ。わかったな？」

有沢は留置所へと連れられていった。

「まあ…なんていうこともないが、後味の悪いヤマでなくてよかったな」

「ええ…」

「ところで、やつのブログとやらには何て書いてあったんだ？」

井岡が言った。

「有沢を『男にしてやった』のは、あのマルさんらしいですよ」

（終）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8999s/>

---

人情の左手

2011年5月10日20時03分発行